

「あげる」「もらう」「くれる」の誤用について —キルギス人日本語学習者を対象に—

アサノワ・グリザル
東北大学大学院文学研究科
tabiygat@yahoo.com

1. 研究の背景と目的

日本語授受表現は、本動詞と授受補助動詞の2つに分けられる。本動詞である「あげる」「もらう」「くれる」の3つの表現は、相手によって言葉を使い分ける「待遇表現」物の授受を表すとともに、行為の授受を表すためにも使われるため、日本語学習者にとっては習得しにくい項目の一つとされている。また、もう一つの困難点の理由としては、キルギス語とロシア語¹を含め、多くの外国語が「与え手→受け手」「受け手→与え手」の2項であるのに対し、日本語は「あげる」「もらう」「くれる」の3項を使い分けることがあげられる。

本研究では、キルギス人日本語学習者が授受表現の場面でウチ・ソト関係を判断した上で適切な授受表現動詞が使えるか、学習者にどのタイプの誤用が多いかを明らかにすることによって、教師が授受表現を教える時の指導のポイントと、注意すべきところを見出すことを目的とした。

2. 先行研究

堀口(1983)は中・上級レベルの学習者の誤用例集から授受表現にかかわる誤用を検討し、その結果、「あげる」と「くれる」間の混乱が多いこと、また、「文法的ではあるが日本語らしくない」文を使うという誤りが多いことを指摘している。授受表現を使って、文法的に正しい文を作成する能力はあっても、日常生活の場面において授受動詞を正しく使える学習者は少ないように思われる。これまでの先行研究ではこの点について明確に検証しているものはあまり見られない。

3. 調査概要

日本語を主専攻とするキルギス民族大学東洋学学部の20名の学習者を対象にし、授受表現の場面でウチ・ソト関係を判断した上で適切な授受表現が使えるかどうかを測るために質問紙を使って、調査を行った。質問紙の内容は、全て8問で選択肢問題である。各問いごとに1つの場面が絵と文章で示される。回答者はその場面に基づく絵を見て、どちらかを主語にし、どちらかを目的語にすることになる。その後、適切な授受動詞を a. b. c. の中から選ぶ。場面を表す文章は日本語で書かれているが、場面の正確な理解を図るためにロシア語の翻訳も書かれている。問題文に漢字が読めないことが原因で誤用となるケースを避けるために、ふりがなをつけた。質問紙

の問いで示された場面は大きく3つの類型に分けられる。1つ目は第3者が自分のためあるいは自分に近い人々のために、ある行為をしてくれたことを表す場面で、2つ目は、第3者に自分があるいは自分に近い人々のために、ある行為をしたことを表す場面である。3つ目は、自分にとってどちらでも同じ立場の人がお互いにある行為をしたことを表す場面である。

4. 調査結果と分析

表1は各問題ごとに、学習者の回答における授受表現の正答率を示している。学習者にとって困難をきたす問いとして問1、問3、問4と問8があげられる(表1)。

表1 質問紙の授受表現に関する正答率

問	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8
正答率 (%)	46.4	72.2	48.7	57.3	68.9	68.7	65.1	45.7

学習者の授受表現の場面でウチ・ソト関係の判断を類型ごとに分析すると以下のようになる。

第1類型: 第3者が自分のためあるいは自分に近い人々のために、ある行為をしてくれたことを表すという場面問2は、話し手(母)が聞き手に対し、「子供は友達にりんごをもらった」ことを話す場面で、問5は、話し手(子供)が聞き手に対し、「母は同僚にスカーフをもらった」ことを話す場面である。問6は、話し手(兄)が聞き手に対し、「弟はマリアにCDをもらった」ことを話す場面で、問7は、話し手(姉)が聞き手に対し、「妹は妹の同僚に傘をもらった」ことを話す場面である。いずれの問いについても、「もらう」と「あげる」の混乱が多く見られる。

具体的にいうと「妹の同僚(話し手が知らない人物)は妹(話し手の)に傘をあげた」、「マリアは兄にCDをあげた」という例が多い。これは、行為の受け手が身内である場合には主語になって「あげる」ではなく「もらう」を使用することを理解していない学習者が多いことを表していると思われる。

第2類型: 第3者に自分かあるいは自分に近い人がある行為をしたことを表すという場面問1は、話し手(学生)が聞き手に対し、「田中先生は木村先生にコップをあげた」ことを話す場面で、問3は、話し手(友)が聞き手に対し、「友達は友達の知り合いの中村さんに雑誌をあげた」ことを話す場面である。問8は、話し手(友)は聞き手に対し、「友達は友達の先生にネクタイをあげた」ことを話す場面である。ここで、「あげる」に関する問題では、学習者が、どちらでも主語を自分に遠い関係の人を選んでしまい、その選んだ主語に合う授受動詞を使ったという誤用である。

第3類型: 自分にとってどちらでも同じ立場の人がお互いにある行為をしたことを話すとい

う場面問4は、話し手（後輩）は聞き手に対し、「ラオ先輩（話し手とあまり中のいい先輩ではない）はともこ先輩（話し手と中のいい先輩）に本をくれた」ことを話す場面である。同じ立場の人がお互いにある行為した場面を表すのは、学習者にとってかなり難しかったことがわかる。同じ立場の人から主語を選ぶということで学習者が迷うのである。また、日本人が考えている人間関係は学習者に十分理解されていないと考えられる。

3つのタイプのうち、もっとも誤りが多かったのは、第2タイプの「もらう」であった。この問題は文法上に問題はないが、場面判断が困難なものであると考えられる。これらの誤りには母語の影響もあると思われるが、場面に即した訓練が行われていないことも大きいと思われる。

5. 考察とまとめ

学習者が「授受表現の場面でウチ・ソト関係を判断した上で適切な授受動詞が使えるか」については、学習者が、日本人の考えているウチ・ソト関係をまだ十分理解していないことが示された。学習者が問題に取り組む際、自分にとって近い関係の人か、遠い関係の人か判断できないまま、使ってしまう傾向が見られる。

間違いが多く認められたものとして、「もらう（正）」に対する「くれる（誤）」の混同が多く見られる「くれる」の問題が挙げられる。

これから教師が授受表現を教える際の指導のポイントと、注意すべきところをみておく。

まず、「あげる」「くれる」「もらう」の混乱で、これは、母語の影響があるとも思われる。これらを踏まえた上で、教師が従来の指導法に加え、ウチ・ソト関係の理解を高めることを目指す新たな指導法が必要と考えられる。

「自分に遠い関係の人を主語とする」を過剰に使用していることについては、授受表現を使う時に自分か、自分に近い人を基準にすることを導入の時に、確認したほうがよいだろう。

また、日本語の授業では文法的な指導だけでなく、登録人物の多い「ウチ・ソト」のトレーニングも数多く行う必要がある。特に上下関係や親疎関係についての概念の導入とトレーニングの必要性がある。

注

- 1) キルギス語では、授受を表す動詞は *алуу*（日本語訳は「もらう」） *беруу*（日本語訳は「あげる」）の2項。ロシア語では、授受を表す動詞は *брать*（日本語訳は「もらう」） *дать*（日本語訳は「あげる」）の2項。

参考文献

堀口純子（1983）「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』52，日本語教育学会，pp.91-103.

「あげる」「もらう」「くれる」の誤用について —キルギス人日本語学習者を対象に—